～シリーズ～「JICA で働く人たちのヒューマンストーリー」

■第４回■　稗田エリカさん（ブラジル事務所　現地職員）

“事業所閉鎖に伴い突如職を失った稗田さん。しかし、これが転機となりそれまで携わっていた業種・職種と全く異なる JICA の仕事に出会えた。「JICA は私にとって、天職です」ときっぱり断言する”

JICA ブラジル事務所の草の根技術協力担当として採用されてはや５年。全く異なる業種から一転、「天職」である今の仕事に就くまでのエピソード含め、これまでの人生を振り返る。

日系 3 世として、サンパウロに生まれた。
母親は幼いころ家族と共にミナス・ジェライス州からサンパウロ市に移り住んだ。「母は若い頃、パラナ州からたまたま仕事で来ていた父と出会い、一目ぼれしました。」とほほ笑む。サンパウロに出張するたび、母親は地域のイベントに誘う等何か理由を付けて父親と会う機会を作るうちに交際が始まった。

結婚後父親はサンパウロに移り、サンパウロ新聞の記者として活躍した。両親の結婚後、稗田さん、そして 1 歳違いの弟の二人の子どもが生まれた。

稗田さんは日本語が堪能な父親の影響を受け、幼いころから日本のことば、文化に触れながら育った。父親のもとで日本語を学びながら、暇さえあれば日本語の本やマンガを読んだ。日本の歌手にもあこがれ、成長するにつれ「少年隊」、「工藤静香」、「安室奈美恵」の歌に魅了された。
現地では公立小学校に通ったが、自然と、気の合う日系人の子たちにいつも囲まれていた。
こうしてごく自然の流れで、15 歳になって進路を決める際「日本語教師になりたい」と思うようになった。
しかしこのことを父親に相談すると、以外な反応が返ってきた。「Voce vai morrer de fome！（ポルトガル語で「餓死するぞ！」）」
「記者として日頃から多くの情報に接していたためか、父は先見の明があったと思います。もちろん日本語や日本文化を重んじていましたが、日本語を教えるというスキルだけでは将来食っていけないぞ、と警告してくれたのです。」と当時を振り返る。

その警告は当時の自分にとても大きなインパクトを与えたという稗田さんは、父親の勧めに従い商業系の専門学校に進学した。その後地元の大学に進学し、会計学を専攻。
その頃のエピソードを紹介してくれた。一度、父は日本を訪れる機会があり、家族のために多くのお土産を携えて帰ってきた。その中に、名刺サイズぐらいの小さな計算機があった。超薄型で、いわゆる『ソーラー電卓』だ。しかもスケルトンタイプ。「当時のブラジルでは珍しく、友達に見せると一様に驚いていました。」

その後大学を卒業した稗田さんに、人生の転機が訪れる。

熊本県が県費留学生を募集していると聞き、選抜試験を受けることに。「とても緊張した」という面接も無事クリア。いつか日本をこの目で見たいという夢が叶ったのだ。「合格と知り、とても嬉しかったです。日本訪問のことを考えるだけでワクワクしました。」
こうして稗田さんは大学卒業後、祖父の故郷である熊本での新たな生活を始めた。

日本行きが決まったとき、他の合格者の中に「果たしてうまく日本の生活になじむことができるだろうか」と不安に思う人もいたようだ。「しかし、私は幼いころから日本語や日本の文化に触れ、『ブラジルにいる日本人』という意識があったので、きっと大丈夫。」と思っていたという。

■担当プロジェクト視察の様子

しかし、実際日本で生活をしてみると、最初はカルチャーショックも多かったそうだ。
「ゴミの分け方と出し方が分からず、同じアパートの住人から『収集日以外はゴミ出すな！』と怒られた時はショックでした。また大学での規則も細かく、最初は戸惑いました。」と振り返る。
「ブラジルの中の日本人」だと思い込んでいた自分が、実は「日本の中のブラジル人」だった側面を思い知らされたという。

その後、日本に適応する努力を重ねた結果、日本の留学生活になじむことができ、充実な日々を過ごした。
「よい意味での驚きもたくさんありました。例えば、日本は『男尊女卑が根強く残っている』と聞かされ、そのイメージがありましたが、実際は違いました。男女関係なく教育の機会に恵まれ、立派な仕事をして自立している女性が多くいることに感心しました。」

日本の大学での国際マーケティングの 1 年間の勉強を無事終え、その後ブラジルに帰国。稗田さん 23 歳の時であった。

帰国直後、人生で初めて就職活動に臨んだ。それまで勉強してきた知識と日本語とを生かせる仕事を、と思い、サンパウロの日系企業複数社で営業事務、駐在員の補助業務、社長秘書等、総務・経理系の業務経験を積んでいった。最初の会社では職場の対人関係がうま

くいかず、帰宅後泣く日々が続いたが、やさしい上司にも恵まれ、半年ほどで職場の雰囲気にも慣れたという。その後、難易度の高い業務を求めて転職を重ねるうち、業務に対する知識・経験が蓄積し、スキルアップしていった。そして気づけば、総務・経理分野では業務経験 15 年のエキスパートになっていた。

しかし、その後人生の新たな転機を迎えることになる。
勤務していた日本の大手商社系列の子会社が請け負っていた事業が、ブラジル政府内の汚職事件が明るみに出たのをきっかけに突如中止。これを受け、ブラジルからの撤退を表明、閉鎖されることになった。
こうして突然職を失うことになった稗田さんのもとへ、登録していた人材派遣会社から「JICA ブラジル事務所の草の根技術協力事業[i]の担当者の求人があるが、応募してみないか」とのオファーがあった。
これまでの一貫したキャリアもあり、全く異なる業界、職種ポストへの応募には戸惑いがあったが、「応募します」と回答した。

面接に臨み、ホームページ等で JICA の事業について研究した。全力で取り組んだ結果、見事に選ばれた。

■愛猫と共に

「とにかく嬉しかったです。以前から、パウリスタ通り[ii]近辺で働くことへのあこがれもありましたから（笑）。しかし、いざ働き始めると、前任（日本から派遣）との間に経験上のあきらかなギャップがあり、果たして追いつけるだろうか、期待に応えられるだろうか、ものすごく大きなプレッシャーがありました。」と当時の不安を振り返る。
　しかし、持ち前の向上心と、弱い立場にある人たちに寄り添いたい、という気持ちが原動力となり、次第に周りの人たちの信頼を得ることができた。
以前、民間企業で勤務していた時にブラジル日本青年会議所の社会活動の一環でボランティアとして高齢者を対象としたパソコン教室の講師を務める機会があり社会プロジェクトの基本を学んだが、こうした経験も大いに役立った。
採用から 5 年以上経った今、改めて「あなたにとって JICA とは」と聞いてみた。「JICA は私にとって、天職です」と断言した。
稗田さんはこの 5 年間、実務に慣れただけでなく、自身の仕事を愛するようになった。民間企業での仕事はやりがいがあったが、今支援を必

要とする人に直接手を差し伸べることができるこの仕事に携わることで、何倍もの力が出た。
この 5 年の中で一番感動したことは、担当した「PIPA自閉症児療育学級への支援を通じた自閉症児療育プロジェクト[iii]」を通じて目の当たりにした、自閉症の子供たちの母親たちの姿だったという。
「貧しく、母子家庭の親もたくさんいらっしゃいました。制約の多い生活の中、かつ自閉症の子供をかかえつつも、今を精一杯生きるお母さんたちの逞しさに感動しました。それに比べ自分自身は意思が弱く、もっと頑張らなきゃ、と思いました。」
プロジェクトでは、自閉症の子供たちが地域を巻き込んだ支援により、自分で着替えや買い物ができるようになる等、より自立した生活が送れるようにサポートすることが目的。
母親たちから「自分で着替えや身支度ができるようになった」、「自分で歯磨きができるようになった」等、喜びや感謝の声に接したとき、「支援規模（金額）が必ずしも大きくなくても、感動をもたらす成果を残すことができる」と確信した。
　稗田さんの父親は現在の仕事に就く前に他界したが、生前はＪＩＣＡに対し「偉大で立派な機関」のイメージがあったという。「（ＪＩＣＡで勤務する）今の私の姿を見たら、父はきっと誇りに思っていたことでしょう」と目を細める。

■稗田エリカ（ひえだ・えりか）
ブラジルサンパウロ州サンパウロ市生まれ。日系三世。みずがめ座。
2016 年 12 月 JICA ブラジル事務所採用。草の根技術協力事業の担当。
趣味はイラスト（特に日本アニメ風）、読書。
人生のモットーは「七転び八起き」。

※～シリーズ～「JICA で働く人たちのヒューマンストーリー」では、ブラジルで国際協力に携わる JICA スタッフを紹介します。仕事面のみならず、これまでの人生や家族の様子、エピソード等も交えつつ、「人」としての姿にスポットライトを当てることで、ありのままの姿をお伝えします。
---

[i] 草の根技術協力事業：日本の NGO、大学、地方自治体及び公益法人の団体等がこれまでに培ってきた経験や技術を活かして企画した、途上国への協力活動を JICA が支援し、共同で実施する事業。
※詳細はこちら↓
草の根技術協力事業って何？ | 事業ごとの取り組み | 事業・プロジェクト - JICA
[ii] パウリスタ通り：サンパウロ市の中心に位置する、市を代表するメインストリート。
[iii] 自閉症児者の推定人数が 200 万人ともいわれ、自閉症療育の確立が喫緊の課題となっているブラジルにおいて、薬物に頼らず、運動、着替えや清掃など、地域で生活する上で必要となるスキルの獲得を焦点とした療育の導入を目指した協力案件。日本の社会福祉法人と連携してサンパウロ市にて実施。
※詳細はこちら↓

bra_06_s.pdf (jica.go.jp)